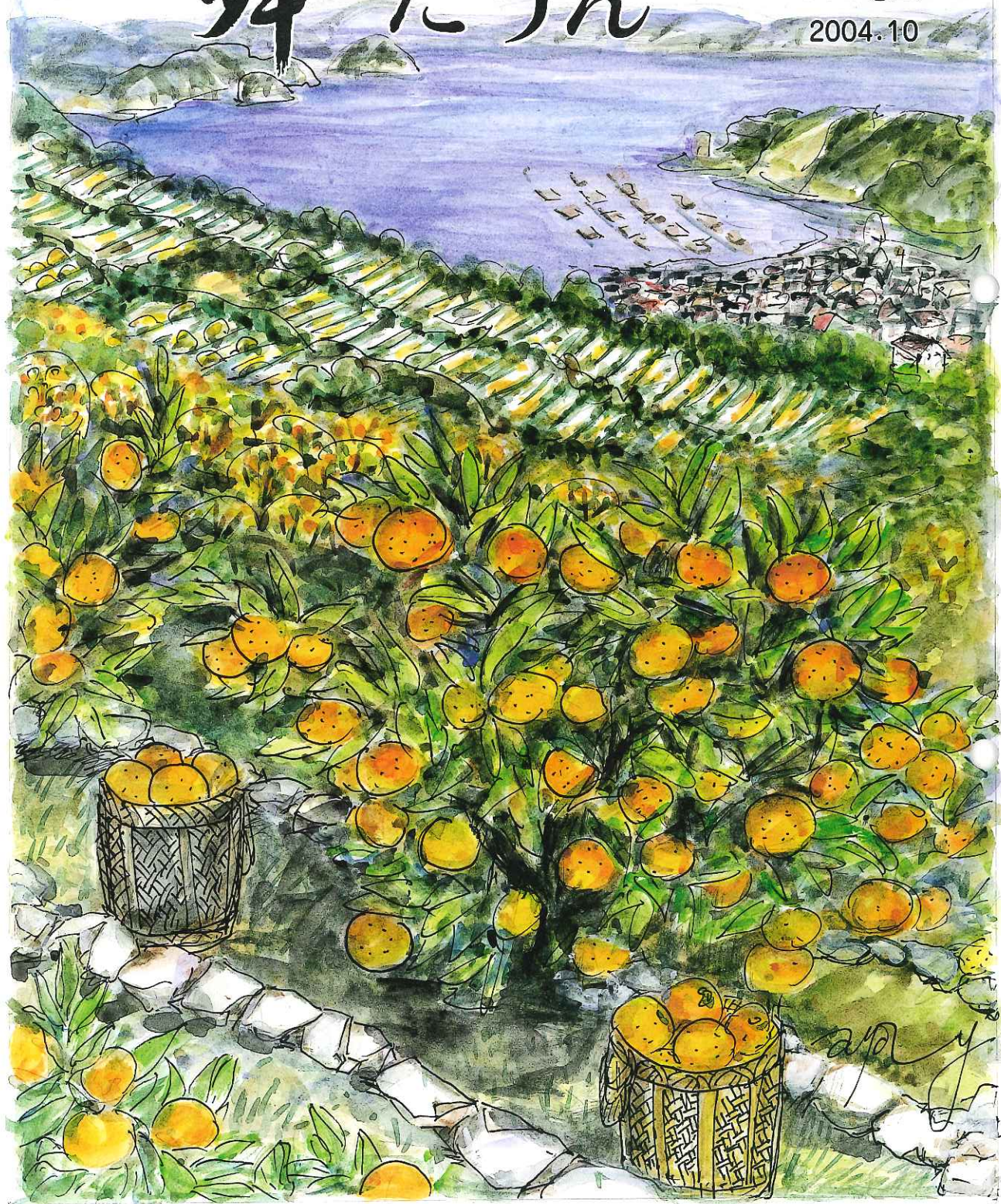


舞 とうん

VOL 82

2004.10



アングル

ゆず一筋、天然の村は楽しさ100%

J A馬路村代表理事専務 東谷 望史 …… 1

①②③ 『わが町、わが村の特産ブランドの原点を探る』

中山間より健康を発信！一地域がささえる無農薬茶ー 四国中央市／脇 斗志也 …… 2

幻の「もち麦」復活！一地域作物を掘り起こせー 東温市／牧 秀宣 …… 4

明浜の青い海と段々畑！一浜風みかんのできあがりー 西予市／宇都宮茂喜 …… 6

我が海は、宝の山！一由良ヒオウギ貝物語ー 愛南町／織田 若一 …… 8

土はよみがえる！一小さな町の自然ブランドー 山形県真室川町／栗田幸太郎 …… 10

夢を醸したワインで世界に挑戦！一町づくりは変人から始まるー

宮崎県都農町／河野 正和 …… 12

論談ーまちづくりー

旅することは考えること！

愛媛大学地域共同センター／坂本世津夫 …… 14

キラリ光るまち

町に楽しさと話題性を！

島根県大田市／渡部 孝幸 …… 16

若者とまちづくり

第二回 若者の発想と行動

双海町／若松 進一 …… 18

トークナウ 『青だし』

内子町／新田佐由里 …… 20

健康であれ！ ～父と地域に学ぶ～

五十崎町／村上 勇 …… 21

媛のかわら版

かけがえのない命と地球を守ろう（その2）

新居浜市／原 綾子 …… 22

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩キ目デス&足ラテス

「わらぐろ」ウォッチング

岡崎 直司 …… 24

研究員レポート

まちづくりについて考える！～ライブ「あっ」を訪ねて（三崎町）～ 鵜野 大作 …… 26

媛のくにフラッシュ …… 28

information センターからのお知らせ …… 29

特集

『わが町・わが村の

特産ブランドの原点を探る』

誰もが自分の原風景を持っており、その多くは「海碧く緑豊かな田舎」にある。この印象深いふるさとの風景は、農業や漁業などの一次産業が支え、そこには営みがある。最近、聞いた話として、旅先のドイツで、地元のリンゴジュースが飛ぶように売れていた。聞くと、町の人たちが「このリンゴジュースを飲まないと、あの村の美しい風景が荒れ果ててしまう」と言っていていくからだという。食べ物と風景が、食べ物と自然がつながる・・・環境と人間、それをつなぐ「かけ橋」が地域のブランドではないか。今回は、地域の特産ブランドづくりの原点に帰り、地域の自立という視点から特集を企画した。執筆いただいた皆さんに共通するのは、モノづくりへの熱い想いである。

（編集子 清水）

表紙の言葉

段畑の石垣は天まで届く。石垣は石灰岩の白、緑の木、実りのオレンジ色が青い海に輝いている。地中海を思わせる光景は明浜の白い段畑です。

石垣を一段、また一段と少しでも多く生活のために築き上げた物。自然の地形を利用して開墾されてきた。お陰で黄金に実ったみかんの糖度を増すのは、太陽と海風、白い石垣の反射で恵みの三太陽。石垣を見上げて汗の結晶の努力にため息をつく。

柳原あや子





ゆず一筋 天然の村は楽しる100%

高知県安芸郡馬路村

J A馬路村代表理事専務

東谷 望史

八月の始め内子の森本さんから携帯に連絡が入った。(財)えひめ地域政策研究センターの清水さんが特産ブランドづくりの原点をテーマに「舞たうん」に巻頭言を書いてほしいと言う…との事。「まいったな」と思ったが、二人で馬路に来ると云うので引き受けた。

最近よくブランド化とか、地域ブランドはどのように作るとか、ブランドに関する事をよく聞く。いくら考えてもそんなこと解るはずもない。本年四月、長崎県のブランドづくり事業で、プロポーザル方式による業者決定の委員に呼ばれた。日本の最大手広告会社五社の提案を聞いていて、ブランドの考え方が少しずつ違う。それ以上にブランドづくりの提案も違う。中には呆れるものもあった。三年や五年でブランドが作れるなら日本はブランドで溢れているはずであるが…。

ある人は馬路のゆずをブランドと言う。私たちはそうは思っていないが、商品には

自信を持っている。今から二十数年前の事であるが、商品はゆずを搾ったゆず果汁しかなかった。都会の百貨店に出向き、催事参加をしていた時代である。

馬路のゆずは気候風土があっている、それは風味に生かされると考えていた。生産量は少ない、だから無名である。しかし生産が少ない事と味は別の問題である。もうひとつ加工設備が小さくシンプルである。その事は、洗浄や商品の管理がしやすく、しかも自分が納得のいくまで使用後の機械を洗浄をした。そこまで自分がこだわって作れば売れないはずがない。そう思ってお客さんに自信を持って薦めた。いつからか「ゆず」が少しずつ売れ始めていった。

売り方も工夫を重ねた。

始めは沢山売りたいと考え、問屋に営業に行った事もあったが、商談は成立しなかった。今思うと良く断ってくれたと思う。それでも何とか売りたいと考え、お客さんに直接売る

方法にした。産直である。しかし馬路村まで集荷に来てくれない。しかたないから、三十五キロ離れた安芸市まで運び全国に届けていた。まだまだ僅かの量だった。

そして風が吹き出した。

関東以北のお客さんに届けていた荷物などが、運送屋の中継が無くなり、翌日届く事になった。しかも中継がない為、運賃が下がり、お客さんは買いやすくなった。一村一品や、村おこしのブームに乗って商品開発や設備投資を行い、いつしか商品アイテムは「ゆず」のみで二十を超えた。

生産者に支払う代金が安定し、生産者が応援してくれる。雇用は六十人を超え、村一番の産業になった。

いつしか、ゆずを売る事よりも村を売り始めた。そして観光客が訪れ始めた。

現在、J A馬路村は、ゆずの森構想を展開中である。全国のお客さんを馬路村に呼びたいために！。



中山間より健康を発信！

—地域がささえる無農薬茶—



四国中央市新宮町
農業生産法人(有)協製茶場
代表取締役 脇 斗志也
(日本茶インストラクター)



ヤマチャが自生する好適地

残暑の強い日差しの中で、茶畑では三番茶芽が旺盛に伸びている。無農薬にもかかわらず病虫害もなく良好な園相である。

新宮の茶栽培は、昭和二十九年 祖父の脇久五郎が、それまでの自生ヤマチャ利用から畑に「やぶきた種」を植えて五十年。約二百戸の農家が高齢化に苦しみながらも唯一の特産品として農薬を使わずに栽培している。

山間部の茶葉は高品質だが農家の高齢化が悩みである。新宮とて同じであるが、往時にくらべ人口・耕作面積ともに三分の一を割ったにも関わらず、茶園面積はわずかな減少にとどまっている。

これは、ささやかながら新宮茶としてブランド化されたお茶に、高齢農家も愛着をもってくれ、「体が続く限りお茶だけは作りたい。」と意欲をもってくれているからである。

小さな産地が一応ブランド化できた理由が三つある。

一に、新宮の地がヤマチャが自生する茶栽培の好適地で、独特の香氣（山峡の香り）があるお茶ができること。

二に、村人に自然を大切にしている気風が

あり、「ふるさとに学ぶ会」などにより伐採寸前だった百ヘクタールのブナの原生林の永久保存を成功させるなど、自然を大切にしてきた歴史があり、豊かな自然のおかげで土着天敵利用で、村ぐるみの無農薬栽培に成功したこと。

三に、行政・農協の思考が柔軟で建前にとらわれず、先進農家と連携し栽培・加工・販売を支援したこと。
・・・などがあげられる。



新宮の山間にある協製茶場

わが町、わが村の

村ぐるみの無農薬栽培

当園の先代脇久五郎は、昭和二十九年、三千本の「やぶきた種」苗を定植、翌年から穂木を採り挿木育苗に成功、村内外に配布した。その後、村の奨励策で、昭和四十七年には四十七ヘクタールの小さな産地をつくることができた。

そうした先々代の創始者としての実績が農家と行政の信頼を得て、私共の栽培指導を受入れてくれ、昭和六十年頃より村ぐるみの無農薬栽培が定着した。

昭和五十二年から農家向けに当園独自発行の「新宮茶園だより」も百四十号となり、無農薬栽培の指針にしもらっている。

新宮産茶葉の七十%を買い取り、加工販売しているが、産直販売で中間経費を節減、高い生葉価格を支払っており、これが農家の意欲をつなぎ止めているのかもしれない。



ヤマチャの花

共生する茶づくりを

また、行政のお世話で結成された農業支援組織に協力、独自のチームもつくり、耕作困難な茶園の農作業支援を行っている。

市町村合併によって山間地新宮が多数に埋没しないためにも、他に誇れるお茶で新宮を主張してもらいたい。安全で美味しい農産物のできる新宮に、自信と誇りをもってもらいたいと願っている。

先日、「霧の森」で製茶の原点である手もみ茶の講習会を開いた。文字通り四国中央だけに、高知・香川・徳島からも多数参加し、七十余名が集まった。

茶の文字を分けて見ると「草」と「木」の間に人がいる。お茶が共生の作物である証拠である。これからも「自然と共生」、「地域と共生」、「時代と共生」する茶づくりを目指していきたいと考えている。



手もみにこだわる
お茶づくり



霜を防ぐファン



刈草が敷きつめられている無農薬栽培茶園

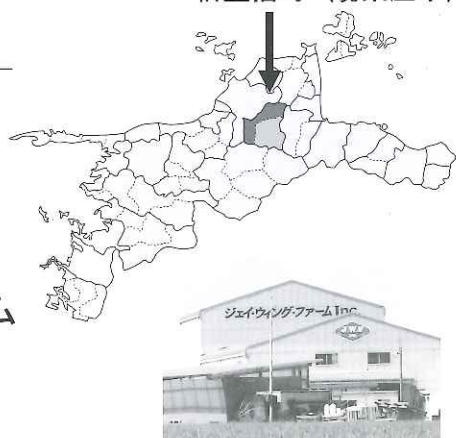
幻の「もち麦」復活！

—地域作物を掘り起こせ—



東温市
(有)ジェイ・ウィング・ファーム
代表取締役 牧 秀宣

旧重信町（現東温市）



もち麦に自分を見た

若い時に「百姓」と言う言葉に何とも言えぬこちよさを感じて、生きがってこの世界に入ってしまったものの大変な業だ（なりわい）と最近つくづく思う。今は一姓しかできぬ自分を見て、なかなか百姓にはなれるものではないと自覚している。米作り・麦作りという仕事は、私が百才まで生きたとしてもせいぜい自分で植える事が出来るのは、四・五十回、一年に一回しかできぬ作物を選んだのも原因ではあるが、これもしようがない。

それなら誰もやっていない物を選ばないと自分が満足できないだろうと、色々失敗を重ねた中で幸運にも出会ったのが、「もち麦」というはだか麦のモチ性品種。大げさだか、この麦に自分を見た様な気がしたのを思い出す。

まったく知られてない作物で、すばらしい穀物なのに、少ない事と色が黒いために人に見とれてもらえず、目の目を見ない作物だった。誰も作っていないため自分しか出来ないだろうと、ついうぬぼれて「こいつを育てたい」というアマノジャクな本能が働いたのかもしれない。また、穀物だから加工に対しての可能性は多いだろうとの思いはあった。もちろん、モチ性という事がもう一つの大事な部分でもある。

周りのものを見つめなおす

ここから、自分の夢物語と想像がふくらんでいったと思う。まんじゅう・うどん・せんべい・パン・ケーキなどが、色々ど頭の中にうかんできた。そして、どこへ行くにも自信をもって、みやげ物としてさげて行ける物がなかったのも幸いしたのではないだろうか。大量生産のものがあふれていたのも良かった。できれば、人と異なった事をしたいと思う自分に、ピタッと合ったのかもしれない。ある会社で頼んで、うどんに使ってもらった事ができた時、とびあがるほどうれしかったのを覚えている。できたうどんを持って、知り合いの所へ行った時は、本当にうれしかった。自分達が作ったものが、こんなに自慢できるものなのかと独りよがりしていた。

しかし、なかなか多くの人に認められるには時間がかかるものだ。十五年たった今も試行錯誤している。しかし、一年、一年、良くなっていることがいい。一品などと言うものは、一年や二年じゃできないことも、この事で知らされる。そのうち、スローフードなる流行語のような

わが町、わが村の

ものが、メディアで騒がれ始めたのも面白い。自分は、流行より少し早く気がついていてた事にも満足した。しかし、自分の回りは、十年・十五年しても気づかないことも知る。身近なものはあまり理解できない事を感じた。自分の回りにあるものは、なかなか良い悪いの判断がむずかしい。

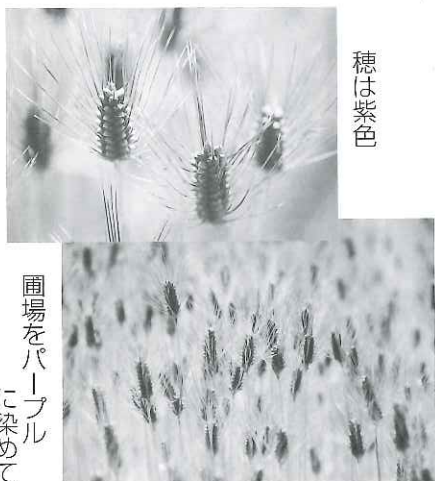
その証拠に、水や空気が売り買いされるなどと、日本のような気候風土で生きてきた者には、ついぞ理解できないものだった。まして、ここまで米と言うものが消費されないとも、思わなかったろう。時代は変化するものなのだ。また、いつの時代かには大切にされる時もくる。そのためには、今、自分達の周りにある物が、どんな可能性があるかを見つめなおさず、捨ててしまうと、取り返しがつかない時代にきているのも確かな事ではないだろうか。

モノづくりの視点

人と同じものを求めなければ、何千通りもの作品が出来上がる事を、今、皆が気づかないと、また、どこへ行っても同じ物しかないなど感じてしまう時代を作ってしまう。「金太郎あめ」と言われて久しくなるが、同じ事になってしまう。

それぞれの家に、それぞれの味のある料理がなければ、おふくろの味も言葉だけになってしまふのではないか？。伝統作物とはそういう事を言っているのであり、古いから伝統だったりもしない。伝統も最初は不可思議な物だったんじゃないかな。長い時間研究されて残っていたので、それが伝統になっただけであろう。今からでも遅くない、そういうモノの見方、つくり方をしないと特徴のない物語りのない物は残らない。私はそう言うモノづくりをしたいという思いだけで、何に対しても自分の目を向けているだけである。農業というものは、自然相手のそういう仕事である。これから、今ある作物、今から出てくる作物に対しても、自分に何かを感じさせられるものがあれば、時間をかけて焦らず、じっくりと作っていければいいと思っている。私にとって

穂は紫色



圃場をパープルに染めて

「もち麦」はそのスタートである。籠に乗る人 担ぐ人

その又、草鞋を作る人。

一人では何もできない。今というシステムとは、右のような事ではないかと思う。システムづくりと言いながら、そのシステムを崩してしまっただのが、現在のように思われる。もち麦を作ってそんな事を感じたのも確かな事である。

それぞれの職人に支えられて、「もち麦」は色々な作品に変化している。野菜であれ、ミカンであれ、手をかけて作った物は、多くの可能性を持っている事を知るべき時である。さもないければ、地域作物の掘り起こしなど不可能である。私は、常々そう思っている。

「食」ほど大切な物はない時代である。その食を作っている農業が良くないわけではない。考え方だけの問題だ。

百姓には無限の可能性あり！



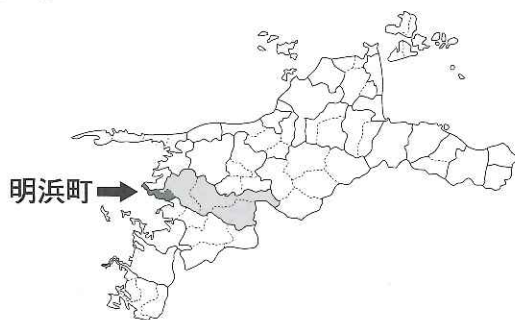
上段：もち麦せんべい
下段：もち麦クッキー
もち麦パン

明浜の青い海と段々畑

— 浜風みかんのできあがり —



西予市明浜町
新田こせがれ会
宇都宮 茂喜



新田こせがれ会の誕生

平成三年九月。県内のみかん産地に甚大な被害をもたらした台風十九号が襲来し、その直後、こせがれ会は明浜町俵津の新田地区に九名のメンバーで誕生した。発会当時の目的は、会員は皆まだ若く経営の実権（通帳）は、まだ親が持っているのが現状だった。そこで、みかんの作り方だけでなく野菜の作り方、共済の仕組みなど、いろいろな勉強をして、二・三年で親から経営の実権を奪い取ろうを合い言葉に活動を開始した。毎月十一日に定例会と称して、勉強会を行った。資金不足のため、講師は無料で教えてくれる方。酒の一本でも下げてきてもらえる方なら大歓迎、といったような調子でスタートした。平成六年には、会の拠点となる「ロッヂせせらぎ」も完成し、新たな活動がスタートした。



会の拠点「ロッヂせせらぎ」

浜風みかんの挑戦

こせがれ会の活動が盛り上がるにつれ、みかんを取り巻く状況も変化が起き始めた。特に、平成十一年から農協の広域合併の波で長年お世話になった宇和青果農協（専門農協）を離れ、JA東宇和として生まれ変わり、明浜共選（浜風みかん）単独のみかんの生産、販売がスタートした。多くの合併では、統合で大きくなっているのに、明浜は反対に小さくなってしまう、小さな共選というより、大きな個選のような雰囲気になった。みか箱のデザイン、出荷先、何もかも一からのスタートだったので、当時の関係者は、大変な苦労だったように聞いている。生産者という立場からも、「今までみかんにはいかなないな」と言うのは、肌で感じましたし、平成十二年から光センサー選果機の導入ということもあり、新田地区（明浜のみかんが一番おいしくない）の農家には、このままでは大事（おかし）になるといった雰囲気強く、同志会を中心（おかし）に美味しいみかんを多く作る方法が研究され始めた。そのうちに、美味しいみかんを多く作ることも大切だが、美味しくないとみかんを作らない努力の方が、明浜のみかんを買ってくれるお客さんも裏切らないし、何

わが町、わが村の

よりも明浜みかんの底上げにつながると考えた。

こせがれ会・浜風みかん何処へ行く

昨年、明浜のみかんを売ってもらっている仲卸の方から、「十月、十一月、十二月の三ヶ月ぐらい少々寝んでもいいやろし、お前ら若いやけん、それぐらい仕事してみんけん」と、ありがたい、激励のお言葉をいただいた。ちょうど、その折、県農えひめ（現在、全農えひめ）より生産履歴付きのみかん（ニュービジネスユニット事業）をグループで出荷しなにかという話があった。ちょうどの時だったので、勢いでOKしたが、後が大変だった。これまでにない作業が増えたため、最初はいろいろあったが、夫婦仲が悪かったら作業効率が極端に落ちる。お互い喧嘩にならないよう、変なチームワークが生まれた。お陰で、クタクタになったが正月を迎えることができた。今の厳しいこの時代を生き抜く方法はまだわからないが、「この間、この店で買ったみかん美味しかったから、また、この店にみかん買いに来ました」と、お客さんに言ってもらえるみかんを作っていきたいし、早くそういう産地になりたいものである。



青い海と段々畑・・・そして「みかん」

明浜は、陸の孤島といわれ、みかんと海の他は何もない町である。

こんな町から、みかんをとったら何も残らない。今、頑張つて、みかんで食べていける町にすることが何よりの町づくりになると信じて、今から、みかん山に摘果に行く。秋には、何処にも負けない美味しいみかんを作るぞ。

明浜。AKEHAMA!

“みかんを見つけたらまず食べてみてください。もう1個食べたくなったら、食べてください。食べてなくなったら注文してください。明浜共選までご一報下さしい。”



みかんと白い石垣が印象的



浜風みかんのできあがり



我が海は、宝の山

—由良ヒオウギ貝物語—



愛南町

内海漁協ヒオウギ貝養殖協議会

会長 織田 若一



旧内海村（現愛南町）

天然採苗が出来る海域をいかして

内海村（現愛南町）は、真珠のふる里で知られている、真珠の元となる親貝（アコヤ貝）養殖で有名な村である。平成六年に、突然おそって来たアコヤ貝の大量へい死で厳しい経営状態が続いている。

追い打ちをかけるように長引く不況の影響で、アコヤ貝の価格も上がらず苦しい状態は、いまだ改善されないでいる。そんな苦しい状態から少しでも収入増になればと目を付けたのがヒオウギ貝の養殖だった。「由良のヒオウギ」と命名した。今年で、合併により内海村は無くなるが、由良半島は無くならないだろうと言うことで決定した。

ヒオウギの形はホタテに似ている、大きさは一回り小ぶりだが「味は、ホタテと比べると濃厚で甘みがある」何よりも鮮やかな色が特長だ。オレンジが一番多く紫・赤・黄色などがある。質問で一番多いのが、なぜこんな色をしているの？。本当のことはわからないがサンゴ礁の保護色だろうといわれている。生息は、房総半島以南に、広く分布しているが、内海村は全国でも数少ない天然採苗が出来る海域を持っている。毎年六月の中頃に杉の葉を養殖カゴにいれ、海中に吊るし、

浮遊する幼生を付着させて採取し、一年半から二年で八センチ以上に成長したものを出荷している。三年前から、ヒオウギ貝の養殖漁業権を取得して、九十五名でスタートした。現在は、一二〇名が本格的に養殖に取り組んでいる。

役場からいろいろな情報が

内海村からは、いろいろな情報や内外へのPR、事業費の半額を補助していただき感謝している。以前、東京築地市場に販売に行った時は、あまりに色が鮮やかすぎる為、敬遠されたが、十五年・十六年の七月に東京有明ビックサイトで開かれた「ジャパン・インターナショナルシーフードショー」に、二年続けて出展させて頂いた。来店者はシーフードバイヤーが主なのにヒオウギ貝の知名度の無さに驚いた。しかし、鮮やかな色が新しい食材にと注目された。しかも、試食をしてみらうと、ホタテよりうまいと、たちまち行列の途絶える事がないブースになった。

手応えは、十分あり東京・静岡・大阪・岡山に販売に出かけた。その成果もあり現在も、ホテル・料理店・業者と、取引がある。今年は、サンプル依頼のあった業者に発送し、商談中だ。今後、生

わが町、わが村の



村の新しい特産品ヒオウギ貝のアクセサリー

食用の売上を伸ばしていくには、冷凍や生きたまま出荷できる方法を考えて行かなければいけないと、感じている。

視点を変えればヒオウギは売れる

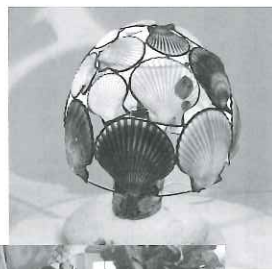
次の、村からの情報は貝殻の利用だった。小さい貝殻は、自分なりに考え、携帯電話のストラップやホワイトボード用マグネットなどに利用している。ストラップのデザインには、結構苦労したが、そこそこの出来ばえと、自負している。ほかに、キーホルダー・根付・ブローチ・ピンなどのアクセサリーがある。おもに、村営のレストラン「ゆらり内海」で販売しているが、連休や夏休みには売上もアップするのではないかと期待している。

転機と言えるだろうか？

三月、村の職員が、口ひげを生やした人を連れて作業場に来た。ヒオウギの養殖場を見てみたいと言う、漁場につき養殖カゴをあげると「チョットまって、カゴから垂れ下がっている海藻を見て」「これ、アヤニシキと言う海藻です。海の中ですと青く綺麗に光るんですよ」と、その嬉しそうな顔を見て、その時は、まだ何に使うかわからなかったが、もしかして商売になるかも？と感じた。その日の夜、また又驚いた。ヒオウギで作ったランプシェード、この貝殻が組み方によって、これほど、人の目を引く輝きになるとは。

よし！これだと確信した

その口ひげの人こそ、NPO法人「日本渚の美術協会」会長の本間清さんとの出会いだった。シーボーンアート「海から生れた美術」。すぐに作ってみたい衝動にかられ、実際に何点か作ってみた。もって完成度の高い作品を作りたい。村の理解と支援もあり、七月にはインストラクター養成講座を受講することができ、村で四人のシーボーンアート・インストラクターが誕生した。協会と関わりをもつようになり、環境や海岸で拾ったもの



ヒオウギ貝で作ったランプシェードは、ヒオウギ生産者の作品



でアート作品を作る話を聞くことによって、意識して海岸に目をやる事が多くなってきたし、海に対する思いやりが以前とは違ってきたように思う。

我々、漁民は豊かな海の恵みの中で生活してきた。今こそ、子・孫の時代まで、この海で生きていける環境を、自分が広告塔になりながら積極的に、けん引して行きたいと考えている。

幸い、(嘆かわしい)？ 内海村には、すぐそこにアートの材料が、宝の山のようにある。ほっとけばゴミなのに、作り方によっては、誰もが目を引く美しく輝くアートになる事を学んだが、今からは、アート作りを通じて海に対して優しさや思いやりを、持ってもらえるような人を一人でも多くの人たちに伝えて行かなければいけないと痛感している。

(内海村は、十月一日に合併し愛南町となりました。)

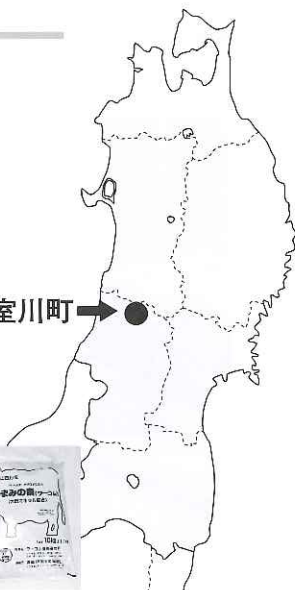
土はよみがえる！

—小さな町の自然ブランド—



山形県最上郡真室川町
(有)ワコム農業研究所
代表 栗田 幸太郎

真室川町



それはブナ林より生まれた

山形県の最北地に私の住む真室川町がある。代表的な中山間地帯に属し、生計の大部分が自然条件の厳しい土地での農業経営に頼らざるを得ないということや、その農業を基幹産業として地域が営まれている現実がある。春木地区では、十年前は三十三戸だったが豪雪地帯であることや後継者の仕事場が少ないことで集落を離れる人達が増え、現在は二十七戸の集落である。

「ワコム」とは、微生物資材でブナの腐葉土等三十六種類の素材から抽出した酵素と微生物を混入培養したものに、木炭やゼオライト等を加えたものである。田に使用すれば土の中の微生物が活性化され根が丈夫に育ち異常気象にも強く、食味が安定してくる等の利点を持つことから小さな村の開発から全国的に土作り資材としてブランド化している。

最近では、異業種の交流や産学官民の共同研究でも高い発酵分解力や優れた脱臭能力も注目され、検証されながら生ゴミ処理機や有害物質除去・低減技術に特殊セラミックスと併用し、多方面で利用され成果を出している。

土づくりが最も大切

実践を通して国内外でもその能力に注目し、環境と共存する農業の推進力になるものとして普及を図り、ワコム農法の活動を全国的に展開している。基本的には命の大切さを訴え、生きるには何が必要かを食と農を通じながら学び、安心・安全な食べ物を自ら生産し、それを食べて健康に生きたい。それには土づくりが最も大切であり、地産地消を含め地域が毎日元気に暮らす原動力が農業であり、資源が循環する事が今やるべき事だと確信している。

環境に配慮した農業を

農家の長男として経営を引き継いだ、当時は複合的な経営基盤をつくろうと模索した時代でもあった。昭和五十年代のことである。地域の人達は冬になれば出稼ぎに行き、他収入で補完するというのが一般的だったが、その頃から経営の基本は、規模拡大ではなく足元を見つめ直し、環境に配慮した持続可能な農業をやりたいと強く思うようになった。

当初は山菜の栽培を研究し、湯呑み茶碗から培養を始めた。ワラビの胞子培養による根株養成がバイテクの始まりで、

わが町、わが村の

特殊な技術も資本もなかった。しかし、人と人との出会いが私を成長させてくれた。農地が少なかったので借用した荒地を開墾して五ヘクタールの農場に作りあげ、種をまき、世話をして収穫することとを自分の体で直に確かめることができた。牛の飼育、堆肥の散布等、身の丈の経営を重んじ多種多様な経営を取り込んで本物を追求している。

減農薬・減化学・有機米の生産、無農薬栽培へのチャレンジ、地域の人達は変わり者としか評価してくれなかった。

J Aもその頃は非協力的だった。しかし、時間をかけ力を合わせながら自然を生かし地域ブランドとして毎日食べる米を地球にやさしい農法でつくりあげ、多様な経営に活かして利用してもらい技術を確立すれば自らの経営も向上すること



多くの仲間とファンが

がわかってきた。立ち上げ時に真室川町による助成事業も推進するうえで役にたったが、それが自立への道に近づく大きな要因にもなった。

地域の活力回復のために

三十年以上研究が続けているが、ブナの研究が予想できない展開になってきている。物づくりだと先が見えてくるのだが、奥が深い。

きれいな空気、おいしい水、豊かな土。それは、ブナの落ち葉から作られる。

「ワーコム」という名前は、3人の子供の名前の頭文字から命名したが、家族愛が少なくなりつつある今日、家族に支えてもらいながら再発見していききたいと考えている。今後も可能性と失敗が出てくると思うが、ワーコム米の誕生、経過、地域への関わり、広がり、そして全国展開している環境保全型農業をじっくりと反芻しながら歩んでいきたいと思っている。

今は一人ではない。多くの仲間とファンに支えられ、地域社会の活力回復の一翼を担えればと望んでいる。人が出会うところに風が起き、文化が生まれ、風土が作られる。地域が変われば国も変わる。

ワーコムの可能性は現在も広がり続けている。小さな研究で大きな未来が発見できつつある。

中山間地での暮らしがおもしろい！

ワーコム米の誕生と広がり



「ワーコム」の名前は、3人の子供の頭文字から

夢を醸したワインで世界に挑戦！

—町づくりは変人から始まる—



宮崎県児湯郡都農町
都農町役場地域振興課
課長 河野 正和



不適地との評を覆して

「田んぼん木を植ゆる馬鹿が居るげな」
こうして、尾鈴ぶどうは、一人の農民が田んぼにぶどうの木を植えたことから始った。都農ワインのラベルに書いてあるフレーズである。

都農ワインの主力商品「ロゼ」の原料になる生食用ぶどう「キャンベル」が、都農町に導入されたのは戦後間もなくのこと、高温多湿の南九州での栽培の難しさなどから、当時、初めて都農町にぶどうを導入した生産農家のことをからかった言葉だが、私達は、尊敬の念を込めて語り継いでいる。

今では、色々な品種を導入し「尾鈴ぶどう」として北海道・東北地方を中心に出荷され、県内第1位の生産量を誇っている。専門家による「栽培には不適地」との評を覆して、生産者の弛まぬ努力によりブランドとして確立した。

第一声が世界のワインを！

このような背景の中から、平成八年にワイナリーがオープンした。都農町に初めてぶどうが導入されてから約半世紀後のことである。今だから言える話だが、売れるとは思っていなかった。事実、専

門家の評価は厳しく、県との共同研究でつくった試作品を酷評されたことを思い出す。

この窮地を救ったのが醸造技術者として招聘した小畑さんである。面接時の第一声が「世界のワインを目指します」だった。生意気だが、「いいワインをつくりたい」との純粋な想いが強烈に伝わってきたのを覚えている。

小畑さんの信念は、「ワインづくりは農業、良質なワインは良質なぶどうから、良質なぶどうは土づくりから」である。しかし、残念ながらワイナリー発足当時の行政や農家の中には「たかが加工品」「売れ残りの価格対策」との認識もあり、意識改革にかなりの時間とエネルギーを費やしたようである。

良質なワインは健全な土壌から

「良質なぶどうづくりのための土づくり」を機に、ワイナリーの敷地内に、生ゴミを堆肥化させる実験プラントを設置して、慣行農法に対する問題提起を行った。（このチームの総括を私が担当している。）これが、農協主催の土づくり勉強会・実証実験へと発展し、環境保全型農業として全国から注目を集め、ぶどう以外の作物にも応用されて大手スーパー

わが町、わが村の

との取引で収益を伸ばしている。この取り組みの中心人物である肥料店の三輪さんが提唱する技術も定説を覆す農法と評されている。定説を覆す農法に戸惑いながらも、畑を潰す覚悟で挑んだ生産農家。妥協しない物づくりへのこだわりと、挫折と失敗から培った不屈の精神。「世界のワインをつくりたい」大きな夢をもって札幌からやってきた強烈なプロ意識を持つ「よそ者」によって、刺激が生まれ、地域の閉鎖性を打ち破り、今まで埋もれていた人材（馬鹿者）達を引き出してくれたのである。

お陰様で、全国からワイナリーと環境保全型農業に数多くのお客様（よそ者）がお見えになり、居ながらにして、日々、

ワイン用ぶどう栽培園



豊かな土が…



生ゴミ堆肥化プラント
「グリーンガイア」

刺激を受け、情報収集・意見交換が可能となった。よそ者活用は小畑さんで味をしめたので、この作戦もしたたかに活用させていただいている。

すべては「変人」から始まる

世界中のワインを対象にした「ワインレポート2004」で最もエキサイティングなワイン100選に選ばれたことによって、彼等の夢は現実のものとなった。「生産農家・小畑さん恐るべし。」である。最近では町長も「よそ者」「馬鹿者」「若者」から始まる町づくり、「変人」から始まる町づくりなどと公言している。このフリーズが、NHKの二十一世紀ビジネス塾で全国放送され、私達はすっかり

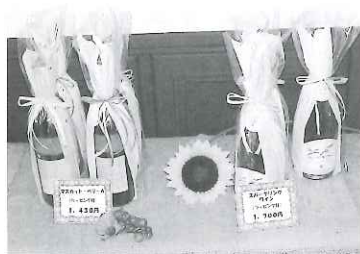
「変人」扱いである。私達は、こんな変人達を登用した町長が一番変人だと思っている。こんな変人達が企画する野外ステージでのジャズコンサート・ぶどう収穫祭・ワイン祭、そして何より都農ワインを一緒に楽しみませんか。

忘れてた！

肝心のワイナリーの経営状況だが、超し良好である。現在二十三万本体制、販売開始から三カ月で完売する。お客様の大半は町民の方。町民の皆さんが「おらが町の特産品」として、お土産や贈答品で町内外に送られるので宣伝効果抜群。感謝している。評判を聞きつけて、九州各県・本州からもお見えになる。

豊かな自然と、信念の馬鹿者、これを引き継ぐ個性ある「変人達」から生まれた都農ワインの挑戦は、これからも続く。

都農ワイン



ワイン祭り

旅することは考えること！

—南イタリアから学ぶ地域づくり—

愛媛大学地域共同センター
客員助教授（地域情報学）

坂本 世津夫



はじめに

いま、人々の価値観が大きく変わろうとしている。産業や技術の発展など経済的な豊かさから、精神的な意味も含めた生活の豊かさ（生活の質）へと変化してきている。これから時代、地域のブランド化を考える上で、「暮らし」・「文化」は大きなキーワードとなる。

他者の目

「旅することは考えること」である。時間のゆるすかぎり、色々なものを自身自身の感性で感じ取る。そして考える。南予には、「旅行」ではなく「旅」が似合っている。「滞在型の旅」、考える空間である。地域の良さは、旅人（他者）の目を通してみないと分からないものがある。そこに住んでいる人々も、色々な地域を旅してみればじめて、自らの地域を理解（評価）できるのかもしれない。ブランドを考える場合も、他者の目は非常に重要である。他者の目を増やすためにも、是非、南予との交流人口（国際交流）を増やしたいと考えている。その仕組みづくりが、地域の活性化、ブランド化には重要であると考えている。

南イタリアから学ぶ

比較し学ぶには、まず気候や風土、景観の似かよった地域が一番である。南イタリアは、大地に石灰岩がゴロゴロかっている。人々は長い年月をかけて、畑の中から石灰岩をひろい出し、自身自身の土地を囲うように石垣を築いている。

この風景は、ちょうど南予のミカン畑に築かれた石垣のようである。南予と違い、そこに植えられているのはオリーブとブドウ、そしてトマトである。オリーブは、古木になればなるほどオイルの品質がよくなると言われる。そういう意味では、新たな農産物を作りあげるには長い年月が必要である。しかし、ここからの気候変化や環境の変化を考えると、新たな農産物を模索することも重要ではないかと考える。

■アルベロベッロ

南イタリアは、歴史の重なりや生活文化に裏打ちされた都市が面白い。歴史的な建物をうまく修復・再生し、暮らしを見せることで町自体をブランド化している。アルベロベッロは、この地方独特のトンガリ屋根の白い家（トゥルツリ）が建ち並ぶ町として有名である。可愛らしい「おとぎの国」をイメージさせる家々が立ち並び、なだらかな斜面に広がっている。まるでキノコの群生のようである。

風景は、どこか内子の町並と似ている。アルベロベッロは、世界遺産にも登録されている。



アルベロベッロ

■カプリ島

ナポリの南、ナポリの町からも見える距離にある小さな島。紺碧の海と島の斜面に点在する白い家（別荘）、一年中咲き乱れる花々、そして「青の洞窟」で有名な島である。船着き場から島の頂上まで、絶壁にへばりついた小さな道をオーブンカーで一気に登ると、そこには別世界の町がある。この島は、ローマ時代から別荘地として栄えた島で、サンダルや家具（木工細工）などの手工品が沢山製造販売されている。また、山頂には多くのブランド店が建ち並んでいる。カプリ島はレモンのお酒、レモンチェロでも有名である。お酒をブランド化する上で、容器（瓶）のデザインなども素晴らしい。また、青の洞窟は、紺碧の海と、洞窟の中に差し込んでくる光が、海水と石灰岩の白に反射して素晴らしいブルーを作り出している。色彩というのもブランド化には重要な要素である。海の青さや夕焼けもそうかもしれない。南予にも素晴らしい色彩が沢山ある。



カプリ島

南イタリアの食文化

暮らしを楽しむのに一番重要な要素は食事（食材）である。南イタリアを旅して感じるのには、各地域に独特の形状をしたパスタがあることである。マカロニタイプのものから、貝殻タイプ、耳たぶ、餃子の小さいような形まで、色々な形状のパスタが存在する。同じ食材でも、色々な形状を考えることで、新たな面白みがあるのではないかと思う。そういう意味で、バラエティーに富んだ食材、料理は重要である。

新しい町づくり

日本の集落は平地（河川の近くや海岸線など）にあるのが一般的であるが、ヨーロッパの集落は山頂などに多い。南予には宇和海という素晴らしい景観がある。この景観を最大限に活かすには、ある程度高い位置から眺める三次元的な視点が必要ではないかと思う。この意味で、カプリ島山頂の風景は非常に参考になる。出来れば、宇和海という素晴らしい景観を活かした町づくり（ニュータウン）を、少し高い場所（山の中腹や山頂）でおこなうのも面白いのではないかと思う。



青の洞窟

最後に

地域をブランド化していくには、地域が一枚岩にならなくてはならない。地域に暮らしている人々が一体にならなくてはならない。地域の情報をみんなが共有し、自ら語れる地域にしていかなければならない。現在、町並博も行われているが、南予が素晴らしい地域になることを願っているし、応援していきたいと考えている。

代表的な南予の入り江



海洋的な南予の風景

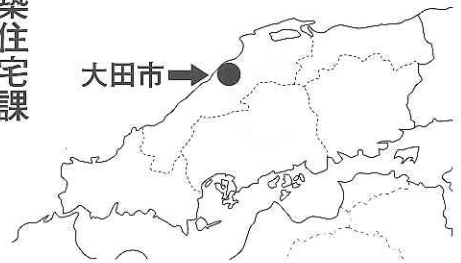
島根県大田市

町に楽しさと話題性を！



大田市役所建築住宅課

課長 渡部 孝幸



鏝絵（ていえ）に魅せられて

一畳に満たない小部屋、私が毎日思索などに使う場所である。この私的な空間の壁に中・四国の地図がずいぶん前から張ってある。えひめ地域づくり研究会議の事務局長でもある岡崎直司さんの住む西予市宇和町と私の仕事場の大田市がほぼ同じ経度で、日の出や日の入りも同じかなと思いつつ眺めていたことがあった。

大田市が「石見銀山」のある大森町に計画している「ふれあいの森」公園の公衆トイレの建設に伴い、フレスコ画をその建物の外壁に描くため、松山市に住む

画家・梅林潤子さんが、平成十年八月、初めて大森の土を踏んだ。

フレスコ画を描こうと思ったのは、重要伝統的建造物群保存地区に選定された大森町や周辺地域に存在する鏝絵に魅せられたからである。又、町並み保存の仕事の傍ら調べてみると、石州左官と呼ばれる出稼ぎなどで生計を立てていたレベルの高い職人が多くいたこともわかった。

フレスコ画を描こう！

フレスコ画は、鏝絵と同じように消石灰を使うが、それも湿式の消石灰を使う。今回、三ヶ月以上寝かせたものを使いたいというので、二十kg入り生石灰八袋を

購入、湿式消石灰を用意した。

キャンバスとなる漆喰壁は、木造建築の変形しやすい下地の影響を受けないような様々な工夫を施し、取り外せるようにもした。

フレスコ画は、下塗りの石灰モルタル（消石灰＋砂）を10mm塗った上に、さらに6mm厚の上塗り面に描くが、経験不足からこの下塗り壁にひび割れが生じ、全て剥がしてやり直すということもあった。彼女も、大作への挑戦が初めてということもあって、恩師である奈良芸術短期大学の高橋敬司先生の指導を何度か受けることがあった。

絵は、岩絵の具を使う。それも上塗りの壁面が生乾きの約6時間が勝負である。自分が描ける範囲しか塗れないという時間との戦いでもある。また、色は乾くにつれ微妙に変化する。だからその変化を計算に入れて描かなくてはならない。逆にその辺の妙味がおもしろいと彼女はいう。

延べ長さ17m、高さ1.1mの折れ曲がつた壁面の図柄が決まって、下塗りを始めたのが十一月の中頃で、十二月の終わりにやっと完成した。

寒風や吹雪のなかでの絵付け作業もあったが、延べ三月寝起きた大森の古い

町並みが彼女の心を癒しもし、創作意欲をかき立てるのに役だったようだ。一人の芸術家が滞在し交流を通して残したものは、きっと新しい風や土となることだろう。



ふれあいの森公衆トイレ

大きな反響と可能性

新聞やテレビなどで紹介されたこともあり、大きな反響があった。なかでもセメントアートの第一人者・品川博さんと知り合えたのもこのフレスコ画がきっかけである。

邑智郡瑞穂町の彼の生家もほぼ同じ経度に入る。同町の明覚寺本堂内にある彼の作品の前ではじめて会い、セメントの可能性に目を見張ったが、原寸大の「蟻」には驚くというより感動した。

これが縁で、大田市役所前にある宮崎

公園の公衆トイレの内外の壁面のデザインと制作を一切任せることになった。平成十二年三月はじめにしては珍しく雪が降り苦労もあったが、息子の福太郎君と一緒に思いっきり腕をふるってくれた。あまりによくできたカブトムシが夏休みの終わりに採集されてしまったことも、左官冥利に尽きると笑い飛ばしてくれたが、ちゃんと二代目のつがいを用意してくれたのはありがたかった。さらに、この工事のほとんどを大工と左官の手間で行ったことも特筆していいだろう。

品川さんとは、昨年五月に再び大田市駅前の駐輪場の現場で会うことができた。今度は品川博・福太郎親子に加え、兄・清志さんが一緒だ。今回も内外の壁面のデザイン、施工の全てを任せた。さらに梅林潤子さんもかけつけて来てフレスコ画をはめこんでくれた。清志さんはステンレスの細工が上手で鋲を自分で作ってしまうほどの器用な左官職人だ。

圧巻は、春の景色を描いた場面だ。桜の花びらは五枚あり、一片に二回鋲を使う。そうすると花びら一つに十回使うことになる。手作りの小さな鋲で盛り上げられた満開の桜には職人の汗と心がこもっている。ほんとうに見事だ。

仕上がりの出来映えはともかく、作品製作の仲間として、共に悩み、苦しさを乗り越えてきたという職人さんらとの絆は何にもかえがたいものだ。

鋲絵など塗り壁の魅力を通し、楽しさと話題性、そして庶民性の溢れた町並みが蘇らないかと一人思う。



松山市在住の梅林潤子さん
(品川さんらの桜の前で)



トイレサイン
(品川作品)

庶民性溢れた町並みを！

若者の発想と行動

えひめ地域づくり研究会議

代表運営委員 若松 進一

「煙会所」で心を熱くした若者たちの中には、「夕焼けコンサート」など夕日や地域にこだわり、まちづくりを進めた地域密着型若者グループ、二十一世紀えひめニューフロンティアグループを組織し「無人島に挑む少年のつどい」などのユニークなボランティア活動を実践した広域型若者グループ、政治を志した個性個人など様々だが、いずれも若者らしい特筆される事例なので簡単に紹介しておきたい。

■夕焼けコンサートを

企画実践した若者たち

夕焼けコンサートは金もノウハウも理解もないまるでないいづくしの中で、「何もないことは何でもできる」「金がいなければ知恵を出せ」の逆転発想から始

まった。金を出さない行政に抵抗し、一口一万円の寄付金を五十口五十万円集め、日本フィルのトロンボーン奏者に「アゴ足」だけの出演を依頼し了解を取付た。また列車が出入りする無人駅のプラットホームを舞台にする奇抜なアイデアに「前例がない」と断るJRを、「国鉄は前例がないことをしないから(国+金+失+赤字)赤字になる」と説得し渋々許可を貰った。さらに「双海の夕日は美しい」と褒めたNHKに番組制作を懇願した。

ポスターや看板作りまで全て手づくりの無人駅プラットホームコンサートは、梅雨の真つ最中ながら好天に恵まれる運も味方して約千人もの観客を動員し、NHK「西日本の旅」というメディアに載って日本全国に発信されたのである。

若者の望むコンサートは演歌の似合う漁村や大人には受け入れ難い。ましてや実績のない若者のたわ言など選挙や行政の役には立たないと無視されることが多い中で、実績は行動の後からついてくると、勇猛果敢に取り組んだ若者の勇氣ある行動に、大きな拍手を送りたい。



夕焼けプラットホームコンサート

■「無人島に挑む少年のつどい」などを企画実践した若者たち

若者の発想は冒険心そのものだ。セスナ機をチャーターし「空からふるさとを見る運動」を起こしたことを皮切りに、「今やれる青春」「二年「事業」」「社会への揺さぶり」の三つをテーマに、「無人島に挑む少年のつどい」「大野ヶ原モウー

モウ塾」「丸木舟瀬戸内海航海」「豎穴式住居語り部シンポ」など、子どもたちの健全育成に目線を置いたボランティア活動を二十年間にわたって行ないながら「青春塾」「朱夏塾」「白秋塾」「玄冬塾」を組み合わせ、一年に四回、十年で四十回、しかも一回に時計一回りの時間をはけるといふ双海町の廃屋を利用した「フロンティア塾」で、自己研鑽に勤めた二十一世紀えひめニューフロンティアグループの活動は、愛媛県内に大きなインパクトを与えたことは言うまでもない。

彼らの凄さは「天に向かってブツブツ言うな、雨の日には雨の日の仕事がある」と常に社会への揺さぶりをかけながら非日常活動を目指したこと、次なる時代の担い手である子どもたちに焦点を当てたこと、ロマン溢れる冒険活動を二十年以上も続けたことなどが挙げられるが、「今やれる青春」というテーマを聞く度に、使い古された言葉ながら青春とは年齢ではなく心の若さであるとしみじみ思うのである。よく聞く「やれない」という言葉も彼らの行動からすると「やらない」だけの言い訳にしか過ぎないだろう。新しい発想で新しい風を起こすのは、いつの時代も若者の力なのである。

創快塾の熱い議論



フーテンの寅さんの撮影



■政治を志した若者たち

若者の政治離れは選挙への参加を見れば一目瞭然である。自分ひとりくらいという安易な気持ちでそうするのだろうか、かつての先人が血と汗で勝ち取った選挙権など何処吹く風である。しかし一方で地域を変えるには政治以外ないと信じ、自らをまちづくりの渦中に置きながら実践と学習を通してその任に赴いた人もいる。

私たちが主宰したフロンティア塾には全国からまちづくりの仕掛け人や達人たちが数多く集まったが、その塾に熱心に通いつめた二人の青年がいた。今は歳を経て若者とは言い難いが後に相前後して双海町長と内海村長となった二人は、平

成の大合併を前に余りにも短い残された任期を、財政難と戦いながらまちづくりとその手腕を発揮している。

その一人上田稔さん（双海町長）は、大阪外語大学を卒業後、ヤマハの駐在員として世界四十五ヶ国を巡った達人だが、家を継ぐためUターンし私と出会った。初代のまちづくり青年会議会長としてまちづくりの夢を「煙会所」で大いに語り、十六キロの海岸線に千本の桜を植えるなど商工会長を歴任しながらまちづくりの先頭に立って奔走した。

またもう一人の加幡仁一さん（内海村長）は真珠貝のあるさと内海村で真珠養殖業に携わりながら若くして村会議長を歴任した。えひめ丸事故は記憶に新しいが、私と同じ愛媛県立宇和島水産高等学校の卒業生という縁の深さもあってフロンティア塾の塾生となったが、片道三時間の道程を隠することなく通い続け、多くの人脈を得ている。

鉄人も熱いうちが打ち所、人に会うて教えを請うもよし、異文化に触れるもよし、はたまた志を立てるもよし、大切なことは自分の幸せだけを考えるのではなく、常に他人とふるさとのために何ができるか考えることが寛容である。

私が語るには、とてもお粗末なこと、知力・体力・気力が必要不可欠な課題をなかなか実現化できないじれったさを感じる今日この頃。いわゆる若者らしい斬新な発想はないものと自問自答しつつ、何かこれまでの自分とは違う冷静な私がここに居て、本当の自己表現ができるかどうかかわからないが、この機会に整理してみたいと思う。

私が感動してきたコト、情熱を注いでいるコト、そして想像している未来の姿とはどんな姿なのか。ある先輩から言われた「百年先が見えるか」と。百年先、生まれ育った町、あるいは第二の故郷はどんな姿であることが、自分の望む町なのか……。

戦争を経験しない私は、整えられた環境ですくすく育ち（身長170センチ）、子供から大人へ、妻へ、母へと歩いている。学生時代が終わり、再びわが故郷である内子町に足を踏み入れたとき、山や川、澄み渡る空や大地の恵みに感動し、母校の中学校を背にお寺に向かう家並みで、懐かしい人に出会い、立ち話をし、そのうち夕焼けの空が家屋の優しい色を包み込み、心が動いた。私はそれから内子の町を愛したいと感じ、自分の存在を問い

ながら私の道を模索し、何の因果か現在の職場でまちづくりのお手伝いをしていく。

百年先、ここ（日本、内子）にあつてほしいのは、内子の「美」。「ごめんください」とのぞいた庭には、家主が愛する野の花が咲き、「この階段の向こうには私の宝物がたくさんあるのよ」と嬉しそうに話すおばあさんの大事に使われた生活道具類が存在する。近くの路地や河原で遊ぶ子供たちの目には、元気に泳ぐメダカや元気に咲くレンゲの花が映る。古

『青だし』

青出しとは、ハゼの実から搾り出された蛹を精製する第一工程のことをいう。私の小さな知力等を搾り出し、これから質のいいエネルギーを積み上げていきたいという願いを込めて



翌朝、ハゼの成分にまけた私の顔に、多大な変化が起きた。恐るべしハゼ、されと退くことなれ競争心！

内子町
町並・地域振興課
新田 佐由里

いものばかりでなく新しいものも上手に取り入れながら、内子らしい、私たちらしい生活が続いていること……。しかしこの「美」は、無意識のうちに形成され、維持されるものだけでもなく、一瞬にして壊されてしまう、弱くて儂いもの！使えない、古き物は壊され、空き家、空き地、コンクリートの駐車場へ。生きるためには手段を選ばずという生き方では、私は何も残せない、残らないと思う。

私が見ているものは何か、これが内子らしさだと見るべきものは何か、家が土地が、人が、町が、教えてくれるものは何か、常に先を望み、いい仕事をして後世へつないでいきたい夢は大きく……と述べているうちに少し自分を取り戻せたようだ。この続きは現場で……。



後世へ引き継がれる「美」

「健康でありたい」とすべての人が考えていると思います。

大正生まれの父も幼少の頃は病弱で、戦争中は満州・ラバウルでは生死の境を経験し、戦後は農業一筋に生計を立てていましたが、四十才後半は心臓が悪く苦勞した様で、運悪くか運が良かったのか破傷風になり、血清投与のおかげで体質が改善したのか健康になりました。入院先の病院でも助かったのは初めてだったそうで、その後、家族の健康には特に気を配っていました。

時期を前後して、乳牛を導入し増頭する中で、できた堆肥は水田へすべて還元しましたが、水稻は青畳をしいた様にことごとく倒れてしまい、収穫は減少してしまいました。これらを見て化学肥料を減らす以外に無いと考え、化学肥料を年々減らし収量が安定した時が、無化学肥料栽培の始まりだったと思います。そうした中で虫もつかず病気もつかず、これなら無農薬栽培が出来ると実感しました。一時期、土壌分析の仕事を経験しており、この経験から有機質を使う事によって『土づくり』が自然と出来ていたのだと、今思っています。

現在、主に私と母とで約二ヘクタール

健康であれ！

～父と地域に学ぶ～

飲む健康
・食べる健康応援隊

村上 勇
(五十崎町)



手製の竪穴式住居

の農地を耕作しています。乳牛は住宅地のため、残念ですが今年飼育をやめ、米と野菜が主です。無農薬栽培は、雑草と共生のため収穫放棄する圃場もあり、規模が大きいことはいいいことだとは言えない事もあります。

「無農薬・減農薬野菜」を直接販売しようとして二十名で直売所『りゅうぐう市』を立ち上げましたが、供給過剰の為、九月に五十崎町の遊休施設を利用して、「有しあわせの黄色いハンカチ」を設立しました。町・県・商工会など各方面からご協力を得て発足し、出荷者は五十名と小さい直売所ではありますが、それぞれに、

こだわりの農産物・加工品・手工芸品と取り組んでおります。九月に台風十八号の被害を受け、荒波への船出となりましたが、農家の意欲は満々です。アイデアを生かしたアイスクリームとシャーベットは好評で、加工場を利用し新商品開発により五十崎ブランドを育てたいと考えています。また、国営パイロットや遊休地を利用し体験農場も計画しています。八十八カ所寺参りのへんろ道でもあり、夏季はシャワーを計画中で休憩所として利用したいものです。

学校の授業の一環で、総合学習の時間に農業体験や話しをする機会がよくあり、農業に経験の無い小・中学生でも関心が相当高いことを実感しています。学習するのであれば、農業と歴史をドッキングしたほうが、生徒もより関心が高くなると思います。「竪穴式住居」を家の側に建てました。私の住む地域は、水につからず、山津波もなく、二千年来住みよい所であったと思います。この発想も昭和三十年代に父が小規模基盤整備をしているおり、水田から住居跡の炉が出土し、長年の夢が叶ったもので、今後、高床式を建てたいと思っています。

ひめ 媛のかわら版

かけがえのない命と地球を守ろう!!

—子どもたちの健全育成と環境教育を重点に—



新居浜市 元グループひまわり

代表 原 綾子

エコーひまわりの活動

「エコーひまわり」三十三年間の活動は、限られた紙面では書ききれません。昭和五十四年七月「かけがえの無い命と地球を守ろう!」をスローガンにし、グループ名を「グループひまわり」に変更したとき、「大風呂敷を広げる!」と、笑われたものです。

田辺聖子氏は「生きる」ことは文化だと仰っています。私は、他の種々の文化・歴史・芸術・経済・・・総べて、命があつてこそだともい、生活者としての立場から「命を守る活動を!」と思い続けて来ました。

「エコーひまわり」の活動の特色の一つは、活動が多岐に渡っていることです。もう一つは、高校生が活動に参加協力してくれていることです。勿論、高校の先生方のご理解とご協力の賜ですが。

「女性学ってなあーに」「おばあさんの知恵袋」など冊子も九冊になりました。グループ活動は市民と遊離したら駄目、常に市民と共にしなければならぬから、一人でも多くの方々に、参加・賛同・共鳴して貰いたいものと、グループはその方法を模索し続けました。「学習会、実習、実演、講演会、シンポ、フォーラム、シ

ョー、展示、調査、冊子作り相談、リサイクル、リサイクルハウス(四年間)、アンテナショップ、フリーマーケット、共同購入、石けん類の販売、ひまわり酵母パンの製造販売(内地産小麦粉、天然酵母使用。平成十五年十月二日迄)、みかん石けんの製造販売。全国消費者フォーラム、消費者神戸会議で八年間連続発表。(神戸会議は十五年からクローズ)などと、精一杯頑張りました。「これが最後かも、心残らないように」と・・・。

みかん石けん

昭和五十九年四月に発表した「みかん石けん」とは、石けん運動推進の過程での発見の一つで、後年、毎日新聞社の賞を戴きました。しかし、ある圧力でグループは崩壊の危機に。現在でも市内の公の場所では、唯一、ウイメンズプラザのテスト室で、石けん作りが出来ます。

そこで、ひまわりは、八か所の講習会場を用意して危機を乗り切りました。会場の新設や改造、借家や設備の充実に約二百万円を投入しました。その折り、市民の方々と桃山短大、企業、マスコミの皆様にご協力戴きました。今も感謝です。

リサイクルハウス

会員の五十坪の持ち家を借りて、グループの活動拠点として「リサイクルハウス」を開設したのは、平成八年三月です。同時に、グループひまわりを「リサイクルハウス・エコひまわり」と改名。ハウスは、金・日・祝祭日・年末年始以外はオープンでした。このハウスと外部施設で活動し、年間動員数二万人の日標をたて、平成十年、その日標数を突破できました。しかし、残念ながら家主の都合で、平成十二年三月に閉鎖しました。

平成十二年度から「生活学校」に入校し、メインにマイバック運動を掲げて活動していましたが、平成十六年三月、「ひまわり」は三十三年間の消費者運動を閉じました。



熱心な学習活動

グループさつきの展望と祈り

二十六年の歴史を持つ「グループさつき」は、誕生時は「さつき読書会」と呼び、「心を耕すよりどころに」と、発足した小さな読書グループでした。「グループさつき」への改名は平成十三年。

平成十六年四月、ひまわり元会員約二十名を迎えた「グループさつき」は、活動目的を定め組織づくりをしました。

目的は「『命と環境を守る』だが、特に子供の健全育成と環境教育に重点を置きたい」と。

組織は「グループの中に小グループを作り、各々小グループの会長が責任をもつて会を運営する。グループの全体会は二・三か月に一回以上開催。グループの一つに『子供クラブ』を作る―が、さつきの特色です。

六月から発足の子供クラブは、小学生のみの五十名です。「おはなし会」「おむすび作り」「電池作り」などをしながら子供達と向き合っています。「人形劇」「ティチャードゲーム」「パネルシアター」等々予定が一杯です。

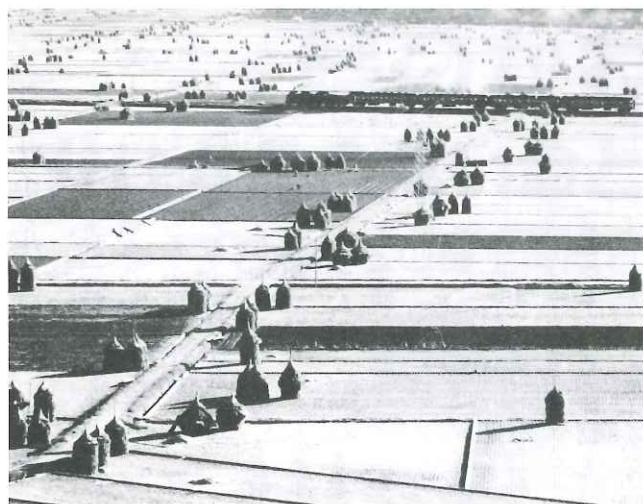
読書会も十一月二十八日「環境を考える朗読と音楽」のタイトルで、朗読の会をする予定です。さつきの活動は、ま

に貧者の一燈かも知れません。それでも点し続けられることを、大きな明りになることを心から祈っております。

電池作り



おはなし会



昭和30年代の宇和盆地石城地区 (石城公民館提供)

“MY TOWN” “うわっちゃん”

歩キ目デス & 足ラテス

第29弾

「わらぐろ」ウォッチング



まちなみ探偵団
岡崎 直司

今回のテーマは、いつもと違って「わらぐろ」を追ってみる。と言っても、実は「わらぐろ」という名称は、どうやら愛媛で呼ばれる方言らしい。もっと言えば、その呼び名が通じるのは四国の範囲くらいらしい。徳島で国道を走っていた際、「わらぐろ」と言う名の三角屋根のドライブインがあり、それを実感した。

「わらぐろ」とは、稲を収穫し、稲藁の保存・貯蔵を目的として作る円筒形家型の藁のカタマリのことである。「わら」は分かるが「ぐろ」とは何ぞや。それを知るには、四万十川の「いしぐろ漁」を引き合いに出すのが一番。それは、川中に石を集めて積み上げ、そこに入る鰻などの魚を採る漁法で、つまりは「ぐろ」とはカタマリほどの意味らしい。

この「わらぐろ」が、愛媛で最も多く見られるのが、肱川の最上流部、標高二百メートルほどにある宇和盆地。この地は、南予の穀倉地帯で、宇和島藩時代以前から南予の米どころ。古墳も多く分布している所を見ると、当時から既に米作が行われていたと見てイイ。そうした中で「わらぐろ」が、いつの頃から登場してきたかは不明であるが、いずれにしてもそれはこの地方の風物詩として、豊かな象徴ともなっていた。特に、宇和盆地



下宇和のわらぐろ
(石城地区のものに比べ細身タイプ)

地で最も米作面積の広い石城地区に点在するわらぐろ風景の素晴らしさは、ふるさとを代表する農村景観としてよく知られた。

ところが、時代が昭和四十年代以降になると、日本中がそうであったように、農業の機械化、生活スタイルの変化などを理由として、徐々に「わらぐろ」は宇和から姿を消してゆき、かつての壮観な風景がどこにも見られなくなっていた。縄、むしろ、孤俵、牛馬の寝床などなど、農作業の様々な場面に登場していたハズの「わら」は、いつの間にか私たちの生活の場から駆逐されていった。建築素材としても、かつては膨大な量の藁が、木舞竹を編むところから作られる土壁の中には使われていた。それが、いつの間にかナイロンやプラスチックに変わり、壁もサイディング張りの乾式工法に取って変わられた。

今、「わらぐろ」を作る技術を持っている年代は六十歳代以上である。経験が無いと「わらぐろ」は作れない。それは、ただ単に藁を積むだけではないからだ。稲刈りの後、稲木に掛けて乾燥させ、脱穀した後の藁を、いつでも再使用できるように乾燥貯蔵するためには、それなりの積み方がある。つまり、積み上げた後で雨が中に入らないようにしておかねばならない。高温多湿な気候風土に合う日本の家の特徴は、その屋根の形状にあるとよく言われるが、わらぐろもしかり。如何に雨が入らぬように藁を積むか、実際にやってみるとその難しさがよく分かる。作り方を見てみよう。

まず、ナルと呼ばれる柱を立てる。その際、ナルの下方を持ち上げ、何度も田に突き刺して50〜60cmくらいの深さに立てる。その周囲に束ねた藁をドーナツ状に置き、積む人、藁を渡す人の二人一組で積んでゆく。普通は夫婦でわらぐろを作り、積むのが男、渡すのが女の役割。だから、わらぐろを積む朝は、出来るだけ喧嘩をしないようにしないといけない。積む最中に渡す人が怒って帰ってしまうとわらぐろの上で男はどうしようもない。藁の束は、切り口を外に先を内に向けて安定なので、渡す側がサポートしつつも、

放射状に並べ積み重ねるが、下部の直径よりも上部が大きくなるように積むのが案外難しい。積む側は全体が見えないのと、足場が不安定なので、渡す側がサポートしつつも、そこは勘と経験で積むしかない。肩の高さまで積むと、藁束の先を揃えて庇を作るが、ここから上、円錐状の部分で最も難しい。ナルを中心に円形が最も広がっているの、動けば動くほど藁は外に押し出され、それをひざで押さえながら仕上げる。最後は最上部をナルにしばって完成する。ここまで熟練の農家の人で約四十分ほど。

当然、人によって上手下手がある。下手が積むと、やがて「わらぐろ」は傾き、バラした時に雨が中にしみ込んでいたりすると使い物にならない。こうして、秋の収穫期から約半年間、春のれんげの頃



藁を積むには熟練された技がいる

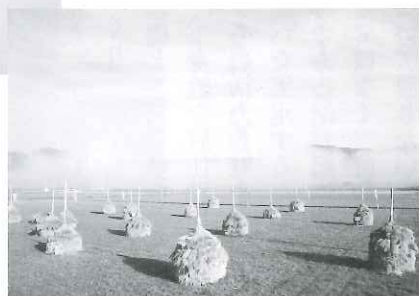
まで「わらぐろ」は宇和の風景に溶け込むのである。

さて、少しだけ全国での呼び名を紹介しておこう。九州では、「としやく」「わらこづみ」。東北では「にお」「によ」、滋賀県では「ちよっぱい」などとも呼ばれるらしい。しかも、それぞれに積み方、形が違う。弥生文化以来の瑞穂の国日本の米文化は、全国的に実に繊細で豊饒な展開を見せているノダ。

宇和盆地の 冬の風物詩



朝霧の「わらぐろ」



まちづくりについて考える！

～ライブ「あつ」を訪ねて(三崎町)～

研究員 鵜野 大作

初めての研究員レポートの執筆…。(財)えひめ地域政策研究センターの勤務となり、はや数ヶ月が過ぎた。

「鵜野くん、今回研究員レポートの原稿を書いてみる？」

と言われた所までは良いのだが、私自身に優れた文筆の才能があるわけでもなく、かと言って湧き出る泉の様にまちづくりの知識が次々と溢れているわけでもないのに、思わず私の口から出た言葉が、「はい、書きます！」と懇願するぐらいの勢いで言ってしまったのは、あとの祭り…。日々差し迫る締切日と白紙の原稿…。現実逃避したい気持ちを何とか抑え、ここは開き直って着飾らず書こうと思うので、お見苦しい点があれば、ご丁承下さい。

自己紹介にて

市役所に勤務していた私は、この四月からえひめ地域政策研究センターに勤務となり、当然、新人の私はいろんなところで自己紹介を兼ねて挨拶する機会が多く、そこではこんなやりとりが…。

「はじめまして。四国中央市から来た鵜野です。」

「四国中央市のどこのご出身ですか？」
お気づきでしょうか？そうなんです！

必ずと言っていいほど相手方に旧市町村名を尋ねられるのである。つまり相手にとって新市名は全く馴染みがないため「四国中央市」という概念がなく、仮にその概念があつたとしても、それは旧市町村単位で区切られている引出しの単なる集合体であつて、旧市町村名を尋ねることによって、そこに個人の属性を求めのかなと勝手に解釈している。だからこそ、「どこのご出身ですか？」と尋ねるのかと思う。

市町村合併は、失われたアイデンティティを再興しなければならぬと共に、従来の枠組みを超えるために新住民が共有・共感できる新たな夢を描く必要もあるのかなと思う。

「まちづくり」ってなんだ

私の役職名「まちづくり活動部門・研究員」という肩書きにも関わらず、前述では「まちづくり」という言葉はあまり出てこない。「まちづくり」「町づくり・街づくり」「まちおこし」「地域づくり」などなど様々な用語が様々な場面で使

分けられていたり、政策や施策がまちづくりという言葉で表現されることもあれば、一方で数名のグループ活動によるまちづくりもある。ハードやソフト、規模の大小問わず、まちづくりに関する情報が溢れているため、「まちづくりの正体って一体何だ？」と自問自答することがあるからだ。

私の机には、ある文献からコピーした「まちづくりの定義」が貼つてある。そこには、『まちづくりとは、地域社会に存在する資源を基礎として、多様な主体が連携・協力して、身近な居住環境を漸進的に改善し、まちの活力と魅力を高め、「生活の質の向上」を実現するための一連の持続的な活動である。』と記述されているが、文献からではなく、自分の言葉でまちづくりについて語りたいものだ…。

余談だが、そんなことを、ある人と飲み屋で語っていると、割り箸の袋にそつと書かれた「啐啄同時^{そとくどうじ}」という言葉…。それも私の机に大切に貼っている。



縁泥片岩の石垣

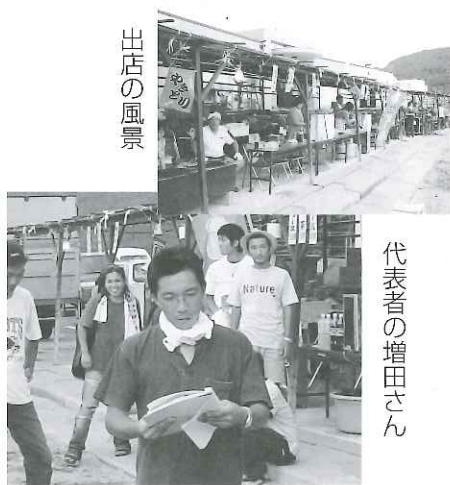
三崎町のライブ「あつ」

さていよいよ本題のレポート。先日、三崎町で当センターが「まちづくり活動アシスト事業」として助成しているライブ「あつ」を訪問する機会があったので、そのことについて報告しますが、過去の研究員を見ても県内のレポート報告は珍しいのではないだろうか。（賢明な皆様はこのような事態になってしまった原因が想像に難くないと思いますが、差し迫った原稿締切日のお陰ということでの場を借りて弁明させていただきます。）

地元にある緑泥片岩を活かしたまちづくりをしている「さががけ橋塾」という若者のグループが始めたライブ「あつ」。例年、夏夜に地元高校生やアマチュアバンドによるコンサートをムーニンビーチ（三崎町井野浦）で開催しており、今年で第七回目を迎えた。

緑泥片岩を活かしたまちづくり「アマチュアバンドによるコンサート!?!」というおおよそ結び付きがあるとは思えない奇抜な発想だが、代表者の増田克仁さんにその点を率直に質問すると「緑泥片岩にこだわらず、自分たちでできる地域の活性化や交流のために、ほかに何かできないかということではじめたんですよ」という。

出店の風景



代表者の増田さん

確かにロック調やポップ系の音楽が流れている会場には、高齢者や親子連れの姿がちらほらと…。

スタッフは全部で三十名程度。準備からMCまで全てが手づくりという活動であるが、これも資金が乏しいからというかし、スタッフに「やらされている」というような雰囲気はなく、むしろ楽しんでいっているという表現が似つかわしい。ムーニンビーチという浜辺で海をバックにパフォーマンスできるということ、今年からは松山市（愛媛）や宿毛市（高知）からもバンドが無償でやってきた。出店近くでは、手づくりのうちわと引き換えに資金の募金活動をしている。都会で行なわれるコンサートやライブと比べるとどうしても見劣りはしてしまうが、地元のた

めに、そして資金がないからこそ、自分たちで何とかしようと汗を流す彼らのその精神はとても美しく思える。

「今はライブの準備が忙しくてなかなか進まないけど、緑泥片岩を使った石垣で囲まれた公園を造ってるんです。石垣というのは単に積み上げたら崩れちゃう。バランスがあつて難しいんですよ。だから地元のおじいちゃんたちに教えてもらってるんです。」と笑顔で案内してくれたスタッフの山口さん。『ライブ「あつ」』では裏方として東奔西走する地味な活動ではあるけれど、本来の活動は、彼らを主役とした最高のパフォーマンスであることを実感した。今後の活動がより実りあるように祈念します。



アマチュアバンドの熱演



● 媛のくにフラッシュ ●

『しあわせの黄色いハンカチ』

—五十崎特産センターが農産物直売所として再出発—

店内には、安全・安心に
こだわった野菜や果物が…



ここには農家の夢と輝きがある！

国道56号線沿いの
「黄色いハンカチ」が目印



五十崎町に、“減農薬・無農薬など安全・安心な農作物を扱う店を作りたい”という農家の熱い想いが実現した。発起人は沖見善嗣代表以下10名の農家で、閉鎖していた五十崎特産センターを活用しようと、五十崎町役場・県・商工会などの支援を得て、農産物などの直売所として8月8日にオープンした。会員自らが直接運営にあたり、有限会社「しあわせの黄色いハンカチ」を9月に法人化。会員は、農家の他に一般製造業、趣味のグループなどで構成。地元で作った安全・安心な食べ物にこだわり、将来は地元産100%の健康料理、健康相談窓口をつくりたいという。

《営業時間》 午前9時～午後6時

《休館日》 毎週火曜日

《問い合わせ》 南しあわせの黄色いハンカチ TEL・FAX 0893-44-5111



● 『宮本常一という世界』

佐田尾信作 著 みずのわ出版 3000円（税別）

民俗学者・宮本常一の業績は民俗学の枠を超えている。「歩いて、人に聞いて、人にまた語る」という姿勢で各地の篤農家と交流し、農業技術や経営指導にも尽くし、戦後日本の農政の失敗は作物の単一化（専業化）だと見抜いた。どのページからも「旅する巨人」のものを見る目の確かさとぬくもりが伝わってくる。風土に根ざした生業を営む人々の笑顔や息づかい。宮本常一が熱いまなざしを注いだそうした「日本の生命力」こそ、閉塞感が充満する現代社会に欠乏しているものではないか。



平成16年度 まちづくり活動アシスト事業
『全国わらぐろミュージアム』開催

全国各地のわらぐろが宇和盆地に集合。
広々とした石城地区の田園が博物館。
パビリオンは呼び名と形の違う各地のわらぐろたち。
愛媛、大分、島根、熊本、韓国など。
伝統的農村文化の多様性を体験し、魅力の再発見を！
今年は「国際米年」です！！

■と き：平成16年10月24日（日）

■ところ：西予市宇和町 石城公民館北側圃場

■ひよう：1,000円（昼食代・資料代）

●午前

わらぐろ製作の体験及び見学
（昼食）…新米おにぎりほか

●午後

◎記念講演会

講師：日色ともゑ氏
（女優）

ゲーム、菓製品・菓グッズの
オークション

■主催：宇和わらぐろの会

（問合せ先 TEL 0894-62-9445
石城公民館・宇都宮）

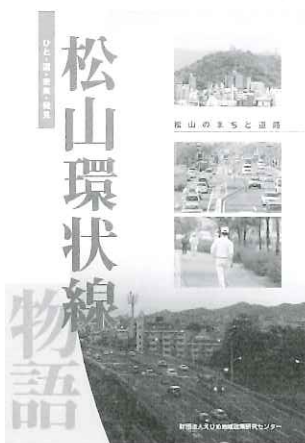


BOOK INFORMATION

●『松山環状線物語』

（財）えひめ地域政策研究センター編
アトラス出版 800円（税込み）

道路整備は地域の生活や経済・社会の発展に大きく影響を与えるものの、その整備状況の変化や効果はあまり意識されることはない。本書では写真やイラストを交え、環状線の沿線の様子や事業の経緯、現在の交通状況等道路整備の基礎的な知識を記し、一般の方々にわかりやすく理解してもらうために編集されている。



お知らせ (財)愛媛県市町村振興協会

『オータムジャンボ宝くじの賞金は、1等・前後賞合わせて2億円。』

1等 1億5,000万円×22本 前後賞各 2,500万円 2等 1,000万円×22本 3等 100万円×220本



ツキをつかめ。

2004年 新市町村振興宝くじ

オータムジャンボ宝くじ

1等・前後賞合わせて
2億円 1等 1億5,000万円/前後賞各2,500万円
2等 1,000万円 3等 100万円

発売期間 平成16年9月27日(月)～10月12日(火) 抽せん日 平成16年10月15日(金)
当せん金支払開始日 平成16年10月20日(水)

1枚300円 9月27日(月)発売 売り切れしだい発売終了

この宝くじの取組金は市町村の若い若づくりや環境対策、高齢化対策など地域住民の福祉向上のために使われます。

印刷／三創印刷株式会社

(財)えひめ地域政策

研究センター

発行／平成十六年十月一日

TEL 089(932)7750
FAX 089(932)7760

(財)えひめ地域政策研究センター

まちづくり活動スタッフ

松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階

〒790-0003

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

***** (清水)

☆ <http://www.ecpr.or.jp>

☆ E-mail: info@ecpr.or.jp

本紙は、(財)愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。